

異形の現在

創作論序説「—螺旋的思考とその模型について」

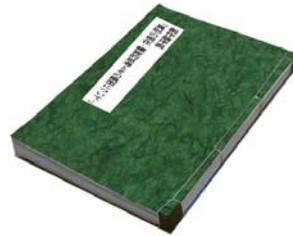
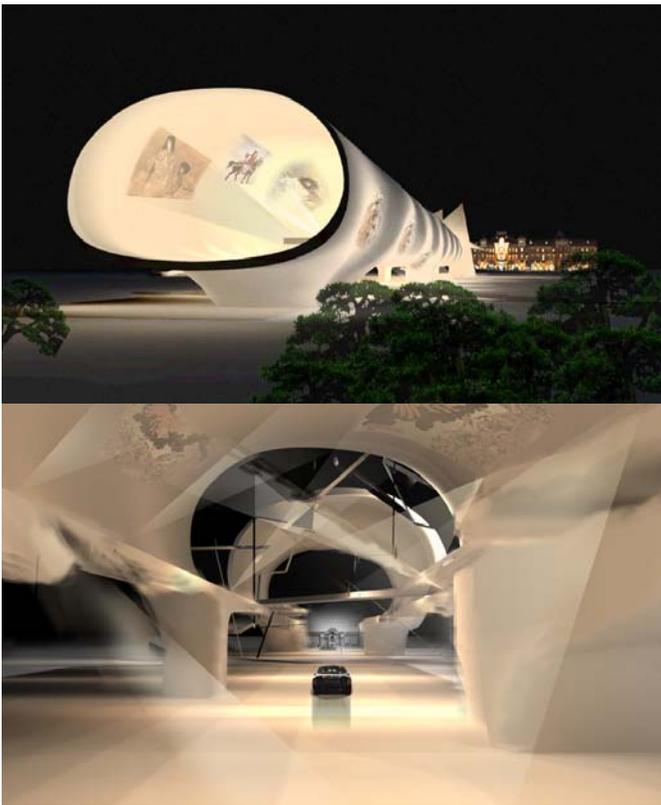
・

設計計画「—20XX年、新天皇即位に際する迎賓・観光施設
及び祭儀の提案」

佐藤研吾

石山修武研究室

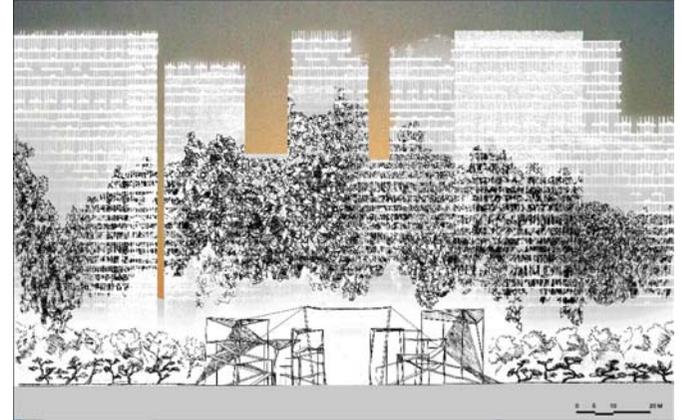
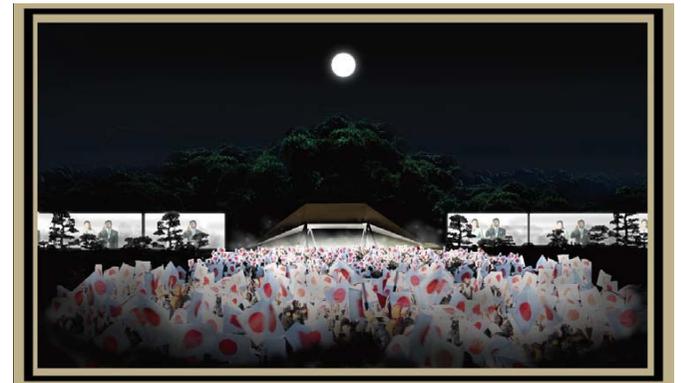
早稲田大学



計画A
創作論序説
「異形の現在 - 螺旋的思考とその模型について -」



計画B
設計計画
「異形の現在 —20XX年、新天皇即位に際する迎賓・観光施設及び祭儀の提案」



修士計画 「異形の現在」：
創作論序説「螺旋的思考とその模型について」
設計計画「20XX年、新天皇即位に際する迎賓・観光施設及び祭儀の提案」
——（早稲田大学、2013）

今回の修士計画を自分自身の考えの組み立ての成果それ自体としてあるべきと考え、二つのプロジェクトを提出した。「異形の現在」と題して、創作というものを根拠をめぐるテキスト、近い将来その状況が生まれることが予想される天皇制をめぐる設計計画、の二つである。

論考では、自分自身の創作という行為の根拠の導き出し方について、根拠を導くための一つの学習過程の組み立て方について論じている。現在自分が立っている場所と、自分が経験した物事それぞれの繋がりを発見し、それらを一本の思考の軌跡の中に配置する作業過程をこの論考の軸とし、またそれが表題で掲げている「螺旋的思考」である。膨大に情報が漂う「現在」、歴史という論理秩序がぼやけつつある「現在」において、自分の周りに存在する物事の繋がりを発見することを拠り所として創作のための思考モデルの導出を試みた。

自分の周辺から論理を立ち上げようとするときに、眼を向けるべきは「現在」というぼやけた状況それ自体であろう。自分が今いる都市・東京と、日本国家という枠組において、2年前の大震災の後にも変わらずに停滞する社会の内奥の不安感に対して、自分が何を応えるか。創作というものが成立するとすればそれは、そうした状況を見つめ続けることによってでしか成立しないはずである。自分自身も含めて特に戦後、あるいは近代化以降、外の世界から形を与えられながら、「現在」まで進んできた、この社会の不明確さ、不徹底の有様それ自体を認めることから始めるべきと考え、またその歴史への接続を試みている。

私は今回の修士計画に取り組む前に、ネイティブ・アメリカンのある部族が主催するコンペに参加した。そうした先住民の人びとと関わりを持つことができた一方で、一元的支配のシンボルとしても担ぎ出されることのある日本の天皇の存在に触れなければならないのは、特に外の世界に眼を向けるために、外の世界で取り組もうとするために、それら異なる世界の間の大きな衝突を自身の内部に抱えなければいけないのではないかと考えたからである。

設計計画で、天皇制の未来について追求したのは、社会の曖昧さと、同時にそれと相似の形を成す自分自身

の立ち位置についてを問いたただすためでもあった。

天皇はその存在自体が今でも、過去の責任を背負いつづけている。一方で、特に戦後の、人間としての天皇への親しみ。慈愛の象徴となることを目指す天皇制の姿もある。そうした要素が併存して、現在のようなおぼろげな社会の全体性を生み出しているのかもしれないだろう。

今回、天皇制を社会、特に東京の一つのシンボルとして設定し、近い将来想定される新天皇即位に伴って起こる社会の一時的な沸き起こりへの介入を、即位の祝賀祭儀の設計をもっておこなう。そしてまた、天皇制への追求のプロセスによって、自分を含める社会の曖昧さ自体への追求を逆照射に展開させることができなかと考えている。

社会のイデオロギーのない無自覚な祝賀ムードを作り出すのが、あらゆるメディアを介して爆発的に流れる情報である。即位に際しての、天皇の移動の行為もまた、社会をうたたかに秩序立てる一つのメディアとしてある。またそれは、天皇制という、中心に空洞を据える東京および日本の文化構造を写し出す鏡のような現われでもある。

その天皇という動くメディアに対応して、皇居前広場及び東京駅と皇居を結ぶ行幸通りにおいて、民衆文化から担ぎ出す過去の神話的形象の移動と、国内外の訪問する人びとの巡回運動の、異なる移動する媒体が交錯する場を演出する。具体的には、3つの祭儀の場面の演出を計画。新天皇の即位の礼の際の祝賀パレード、即位の礼と大嘗祭の間の民間主導のお祭りとして式典、そして大嘗祭後の新天皇が伊勢と京都へ巡幸する際の送りの演出である。

人びと個々人の想像的視座を根拠とする、集団の共同的なイメージとしての、情報拠点の場の生成を、皇居の手前で、東京の中心的空洞に添える場所で試みた。

佐藤研吾（石山修武研究室）

異形の現在

石山修武研究室 佐藤研吾



計画A
創作論序説

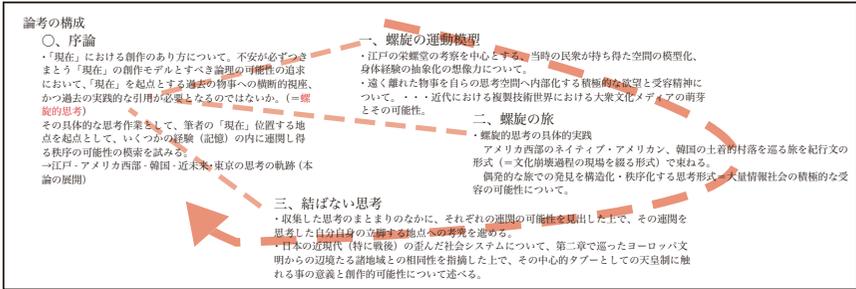
「異形の現在 - 螺旋的思考とその模型について -」



計画B
設計計画

「異形の現在 - 20XX年、新天皇即位に際する迎賓・観光施設及び祭儀の提案」

創作論序説「異形の現在 - 螺旋的思考とその模型について -」計画A



1、創作の所在とその形式について

「現在」における創作はいかなるものか、そして創作主体である自分自身の根底の所在も含めて、「現在」においてどのような思考の組み立てが可能か。この問いに対する仮説的な創作モデルとして、「現在」を基準とした、歴史順序と地域間の距離にも因りない、過去の物事の引用と重ね合わせによるそれぞれ連関の再構築の必要性を出す。

「現在」における、情報の自由な氾濫と、歴史観の喪失、そして楽観的にとどことのできない緩慢とした不安。在の根底はどこにあるのか。根底を問いただし続けなければならない中で、要請されるのが、引用・注釈をを毒なう過去をフラットに見つめる視座である。それが表題で掲げる「螺旋的思考」である。創作がその範疇にある「現在」という時間の一点の根底にあるものほかに、根底を問いただし続けること。問いただし、突き詰め続けることで「現在」を生きる自分の射程を得ること。「現在」を基軸に据えることしかわたしたちにはできない。そして「現在」が起点となって過去の地平を眺め、扱うことができる。時間も場所も異なる事物の群衆の中に、それぞれの連関を見つけ接続を試みる。そこにあるのは、順序の組み立てかたとそれぞれの重ね合わせりだけである。遊戯的秩序とでも呼ぶべき、離散した事物の中からそれらを巡る思考の軌跡を思い描く。

2、本論者の構成について、螺旋的思考の旅の経路

螺旋的思考：異なる離れた場所を思い描くひとびとの想像力の有様と、その内在する力を励起させるための精緻なシステムを現出させた構想力について。各地の、少なくともヨーロッパ・アメリカ中心の思考からすれば「辺境」と見なされる土地の考察は、筆者の立つ「東京」という場所について婉曲的な示唆を与えてくれる。

普遍ではなく個々のつながりの総合への志向：異なるモノたちの中に、繋がる可能性を探し求めるのである。物事は個々に遊離して、拡散していると同時に、それらの連関の筋は満ち溢れんばかりに個々の間を錯綜しているはずである。「普遍」という虚像を確認した現在のわたしたちは、その連関の筋こそ道を見つけない。



設計計画

「異形の現在 —20XX年、新天皇即位に際する迎賓・観光施設及び祭儀の提案」



人口が開け取った緑地、空白を中心とする円環、二つの電波のモニュメントがつくりだす、首都・東京の都市構造

・天皇=自然=タワーとする、メディア都市・東京の深層構造

電波という不可視の情報伝達媒体のモニュメントとして超巨大に実体化されたタワーの出現と、東京の都市インフラの秩序を形成するために禁断なるものとして隠すことでその存在を成り立たせている皇居と天皇。そして、資本主義下の投機対象から逸脱した公園緑地としての人工の自然。これらは直接的な記号物ではなく、その背後に何らかの不可視の構造の存在を導き出すメディアとして具現化されたものであり、これらの矛盾した実体が東京の構造を生み出している。

この事実に対して、情報メディアと偶像アイコンを介して、人びとの想像力が読み出す風景は、一時的ながら、皇室が確保する人工的自然も含めて、二つの電子的幻想のモニュメントである東京タワーとスカイツリーを双方に構える大伽藍として、メディア都市・東京の幻想のインフラストラクチャーを構築する。

・動機と前提

- ①個人の「不安」のためのデザイン
- ②空虚のまま停滞するモノのためのデザイン
消え去りつつあるもの、崩壊しつつあるもの、その消え去り方、細き路の歩み方をどうデザインするか。
- ③筆者自身の立地
なぜ自分が今、天皇制に取り組まなければならないのか。それは自身が足をつけている「現在」の場所、そして自分がとりあえずは所属する人為的につくられた日本という集団組織の本質について触れなければならないと考えらるからである。
来たるとき状況を背を向けるのではなく、状況に身を差して泳いでみる。そこから未知なる風景が開けてくることではない。
- ④将来における必然的課題
- ⑤近代天皇制の問題・日本近代社会の問題
普段気にもとめないような、慣習めいた「時」の流れが、突如として重大な社会的、文化的、そして政治的な問題として浮上り得る。それはまた、我々の日常を実は基盤にしていた社会の深層構造のその一端を顕現させる形式として扱うことが出来る機会でもあること。ある抽象的な文化慣習を鏡面とする、我々の日常世界そのものへのアプローチである。
- ⑥首都・東京の問題



・計画概要

20XX年、決して遅くはない将来想定される新天皇即位に際して行なわれる、即位礼から大嘗祭、そして京都・伊勢巡幸までの一連の祭儀に伴って、国内外からの観光および迎賓客を想定したいくつかの会場演出と諸施設を提案する。

戦後設定された既往の祭事を補填するものとして、皇居前広場で東京都および民間の主導による祝賀式典を開催する。そして一般民衆による天皇制システムの継続的受容の発端として、既存の民衆文化を引用・編集した儀式的模倣創作と、仮設の体験型モニュメントの設置による、宮中文化に関わる神話構造の映写と祭儀のセレブレーションを行なう。

・祭儀の時期と行程

開催時期：
20XX年(11月)、新天皇即位礼から大嘗祭、伊勢・京都親閲・巡幸までの期間



全体配置計画

仮正殿

・三重橋横の傾斜地に仮設。天皇出城の際のゲートとなり、また天皇出席の国民式典の際にはメインのステージとなる。

メディアブース、人形山車シェルター (8機)

・人形山車を納めたシェルターの屋上階に報道メディアのためのスペースを設け、俯瞰的な撮影を可能にする。

習合パヴィリオン

・7体の、過去の天皇を象った人形山車を格納。歩行の巡行ルートを含み、人びとは人形の周囲を巡回体験をする。

山車・神輿シェルター (11機)

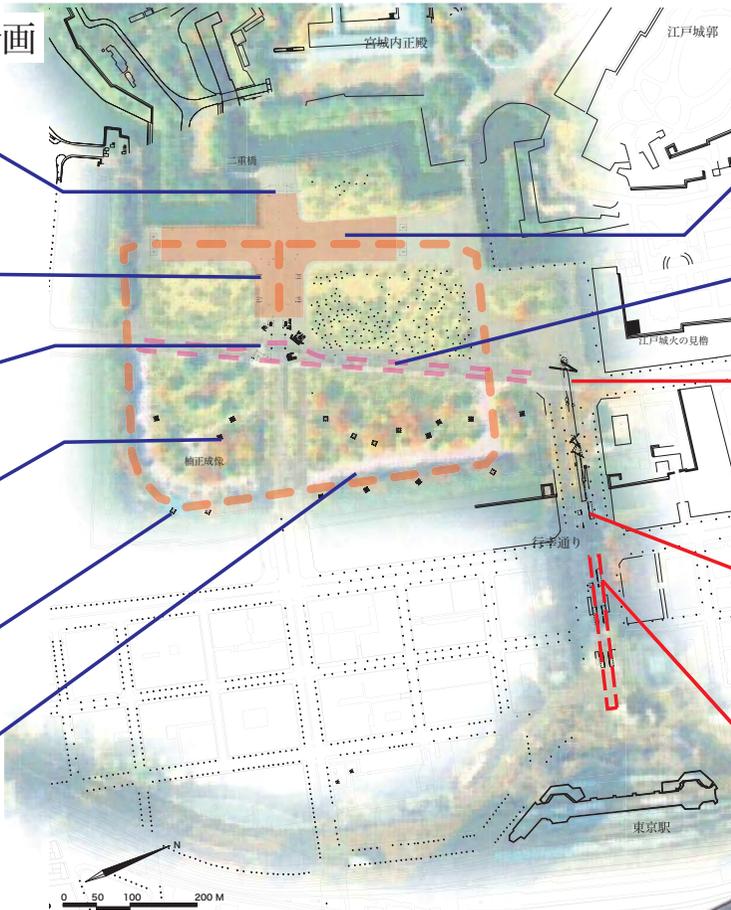
・既存の小格にそってシェルターを仮設。上階にメディア (撮影) ブース付設

山車・神輿シェルター (6機)

・上階にメディア (撮影) ブース付設

7体の天皇人形山車の巡行ルート

**7+8+11+6
=32**



式典会場範囲

全25体の山車・神輿の巡行ルート

神話知覚パヴィリオン
・行幸通り上に仮設する、全長330mの空中通路と映像・視覚展示を主とするパヴィリオン。地上部分で天皇の伊勢・京都巡幸の際の送り出しパレードを演出する。

視聴覚展示小シェルター (地上)

行幸通り地下、皇室美術品と聴覚展示を主とするパヴィリオン・ギャラリー

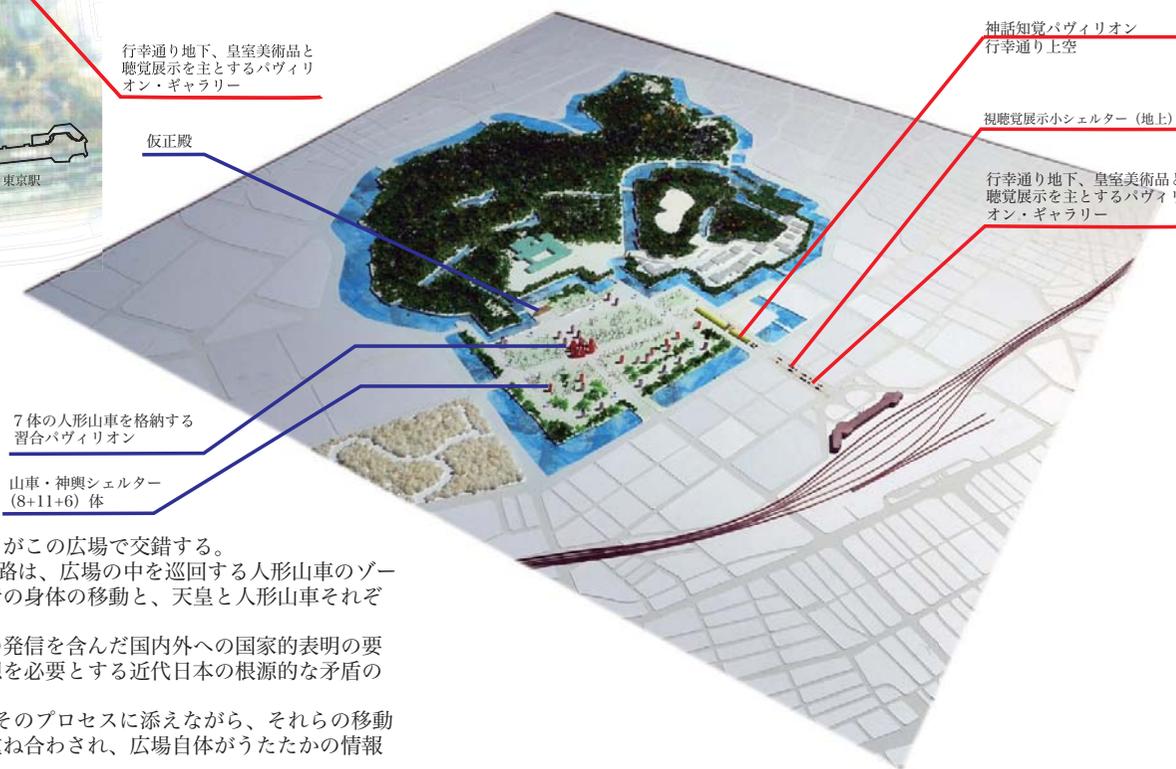
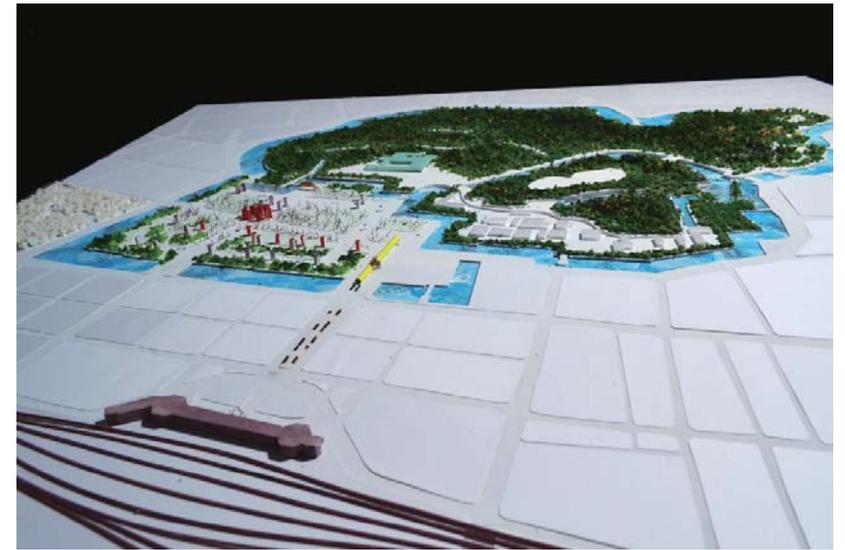
仮正殿

7体の人形山車を格納する習合パヴィリオン

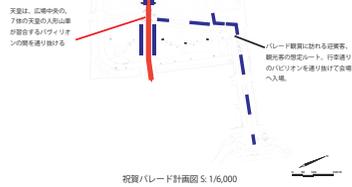
山車・神輿シェルター (8+11+6) 体

3つの巡行の重ね合わせ

天皇、過去の形象を乗せた人形山車、そして訪れる民衆個人々それぞれの巡行ルートがこの広場で交錯する。天皇は即位から大嘗祭、西方 (伊勢・京都) 巡幸までの、宮殿と外を往還する運動経路は、広場の中を巡回する人形山車のゾーンを通り抜ける。もちろん、両者に関係を作り出すのが、訪れる民衆と国内外の訪問者の身体の移動と、天皇と人形山車それぞれのために仮設された建築群での体験から生まれる想像力だろう。本計画が属する一連の祭儀における天皇の移動プロセスは、もちろん民衆への情報の発信を含んだ国内外への国家的表明の要請である。そしてそれは京都から東京へと事実上遷都しつつもいまだに古代の神話幻想を必要とする近代日本の根源的な矛盾の結果でもある。その要請される新天皇の移動プロセスを受認し (つまり「現在」を受容した上で)、そのプロセスに添えながら、それらの移動プロセスを觀賞し自身も巡行する人びと個々人の想像と記憶によって、3つの位相は重ね合わされ、広場自体がうたたかの情報発信拠点として東京の中心に定位する。



祭儀-1、即位の礼終了後の、赤坂御所までの祝賀パレードの出城演出

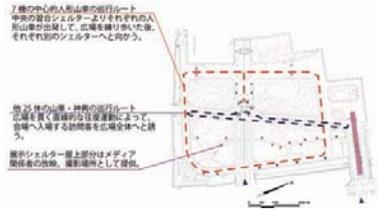


即位の礼終了後のパレードでは、天皇は二重橋の横の仮正殿の屋根の下を通り、中央の人形山車習合パビリオンを抜けて赤坂御所へと向かう。ここで、本会場構成の起点として、新天皇と、複数の古代の天皇の習合体とが向かい合う、超時空的な神話構造軸を演出する。



祭儀-2、即位礼-大嘗祭までの期間に行なう、人形山車を中心とする祝賀祭儀の企画、天皇出席の式典の計画

・第一部、人形山車巡行

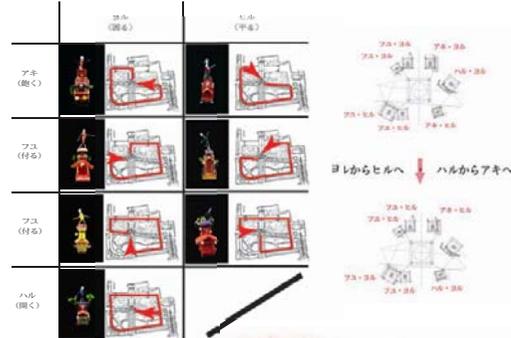


古代の天皇を象徴として乗せた7体の人形山車と、他25体の人形山車と神輿の巡行パレードを計画する。

主な巡行場所である皇居前広場にいる、観客および来賓客のアプローチとして、東京駅から皇居までに至る行幸通りに視聴覚体験型のパビリオンを仮設する。

天皇人形山車七体の巡行のシナリオ

7体の人形山車に祭儀の中心的役割を与える。7体の人形山車の巡行ルートと巡行前後における配置の入れ替えによって、日中のパレードから日没かけて天皇出席の式典へ会場が変化するのを演出する。さらには、かつては逆の順序で行なわれていた天皇即位の礼と大嘗祭の間の期間においての古代への遊行を擬似的に演出する。



皇居前広場の松原を囲んだ巡行の円環がメディア都市・東京におけるうたかたの求心性を生み出す。



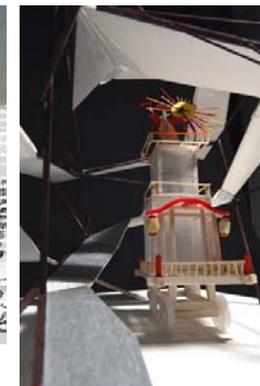
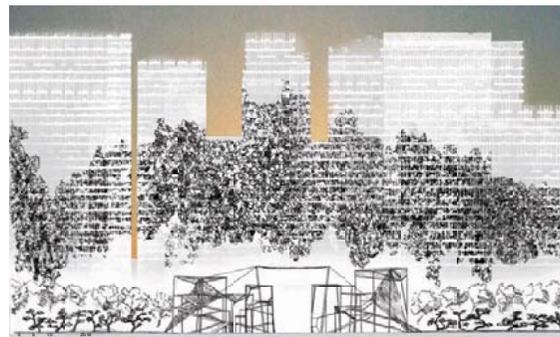
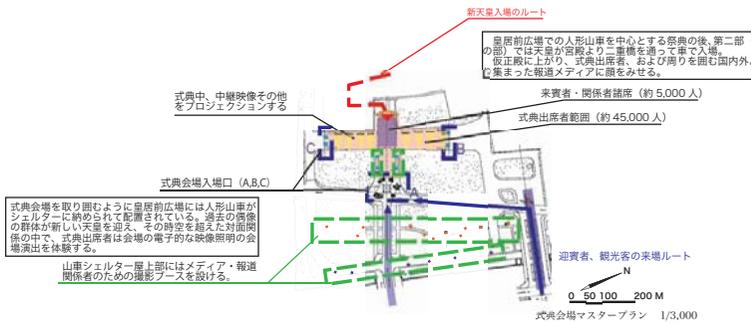
ねじれた構造体はそれぞれ相互に支え合うように広場中心部に集まり、習合して群体としての風俗を形成する。

・第二部、天皇出席の式典



天皇出席の国民式典におけるメディア戦略と、情報・映像に裏付けを向く、式典の様子ジの大量増殖。情報発信源としての場所

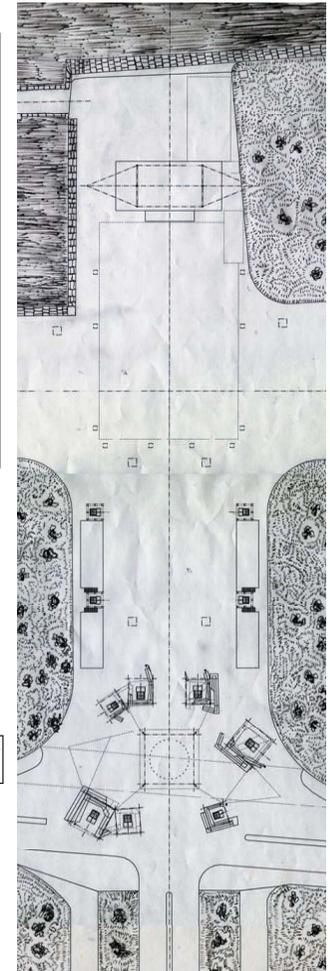
東京都及び民間の主導で行なわれるこの式典は天皇は招待者(客人・神)として登場する。二重橋横に舞台を設け、中心に来賓者諸席を置き、十字型に一般出席者を配置する。前方にはプロジェクションする巨大スクリーンを設け、式典の模様を伝達するとともに照明装置として皇居前広場全体を照らし出す。式典会場を取り囲むようにメディア・報道関係者の撮影ブースが山車シェルター屋上部に設けられている。この式典の様子は世界全国に同時中継され、大量のイメージの流出とともに、そのイメージの発信源として、皇居を背景とする皇居前広場は松と芝を含んだ一つの新たな情報の発信源として東京の中に浮かび上がる。



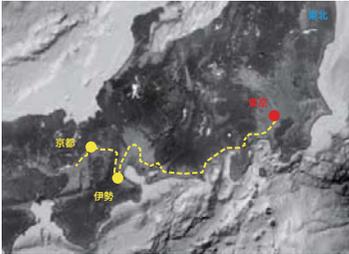
巡拝者の回転の上昇運動に対応して、逆回転のねじれをシェルターの構造体の架構に与える。そして、その連鎖するねじれの力学は、人形山車自体の巡行の円軌道、さらには東京・東洋の都市構造とスケールを超えた相同性を持つ。

人形山車の荘厳と巡拝神話対象の問い取りと想像の付与

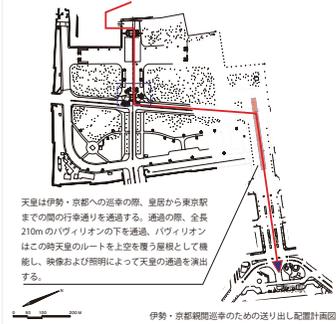
覆い屋の下に納められた人形山車を巡行するように螺旋状のフロアが配され、訪問者はその一本の通路を巡って、四周に広がる皇居前広場の松原を眺めながら、過去の神話アイコンとしての人形の観覧を通して神話イメージを自らの想像の中に内在化する。



祭儀-3、大嘗祭後、伊勢・京都への親閲巡幸の際の送り出しの祭儀の演出

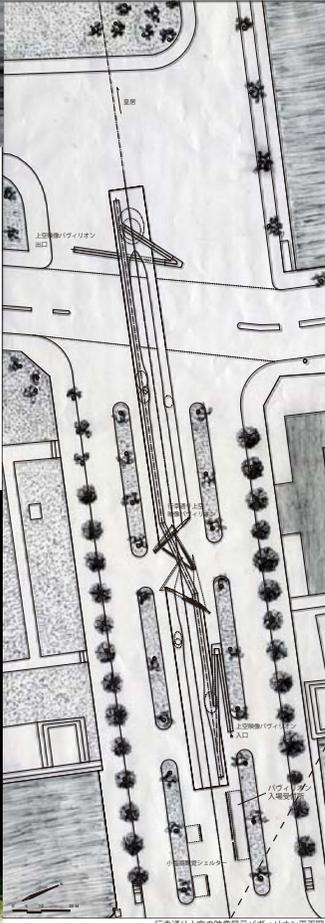


大嘗祭終了後、天皇は伊勢・京都へ親閲巡幸を行なう。その際、皇居の前に位置する東京駅(旧名は中央停車場)から列車に乗り込んで移動する。その天皇の西方巡幸の送り出しとして、皇居から東京駅までの経路を演出する。さらに、それ以外の祭事期間においては行幸通りは国内外の訪問客らの会場への入場アプローチとして機能する。それぞれ全長210mの、行幸通り地下の皇室美術を展示し音響装置を備えたギャラリーと、通り上空の映像によって日本神話を擬似体験するパヴィリオン建築を通して、訪問者は東京駅から皇居前広場へと向かう。

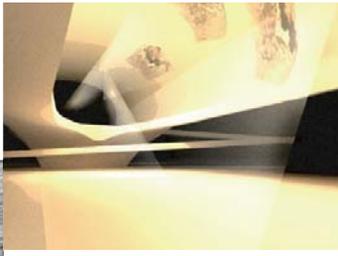


天皇は伊勢・京都への巡幸の際、皇居から東京駅までの間の行幸通りを通過する。通過の際、全長210mのパヴィリオンの下を通過。パヴィリオンはこの時天皇のルートを上空を覆う屋根として機能し、映像および照明によって天皇の通過を演出する。

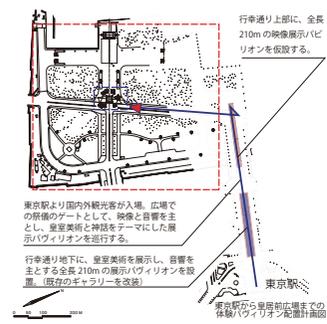
伊勢・京都親閲巡幸のための送り出し配置計画図



行幸通り上空の映像展示パヴィリオン平面図



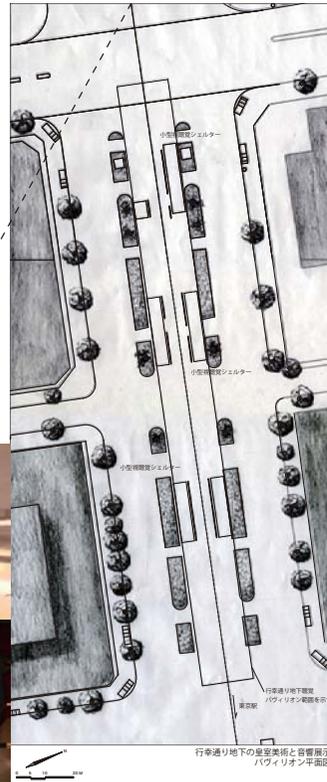
行幸通り上空映像展示パヴィリオンは、東京駅から皇居の森までを結ぶ空洞を内部に孕んでいる。その空洞の中を電子メディアによって浮かび上がった神話の霧が漂う。



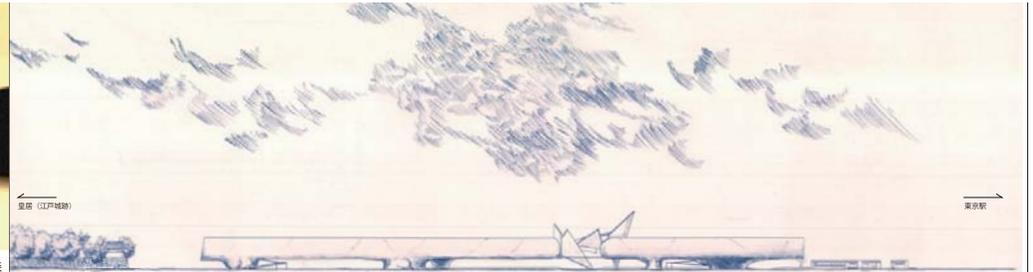
東京駅より国内外観光客の入場。広場での高層のゲートとして、映像と音響を主とし、皇室美術と神話をテーマにした展示パヴィリオンを進行する。

行幸通り地下に、皇室美術を展示し、音響を主とする全長210mの展示パヴィリオンを設置。(既存のギャラリーを改造)

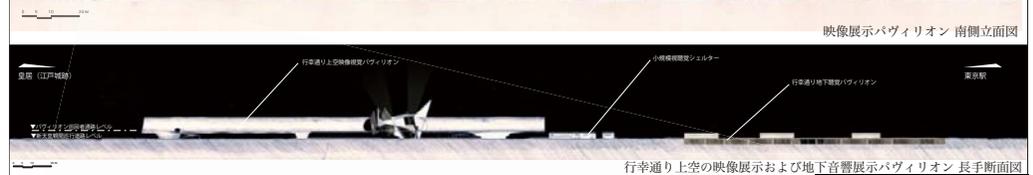
東京駅から皇居前広場までの体験パヴィリオン配置計画図



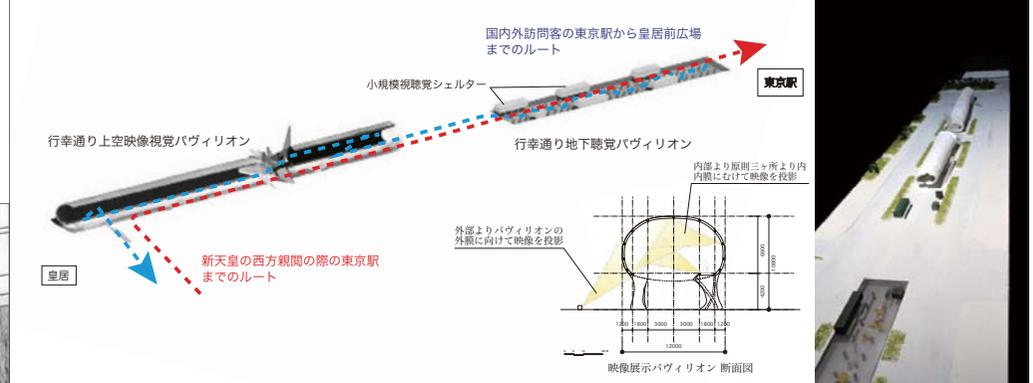
行幸通り地下の皇室美術と音響展示パヴィリオン平面図



映像展示パヴィリオン 南側立面図



行幸通り上空の映像展示および地下音響展示パヴィリオン 長手断面図



国内外訪問客の東京駅から皇居前広場までのルート

小規模視聴覚シェルター

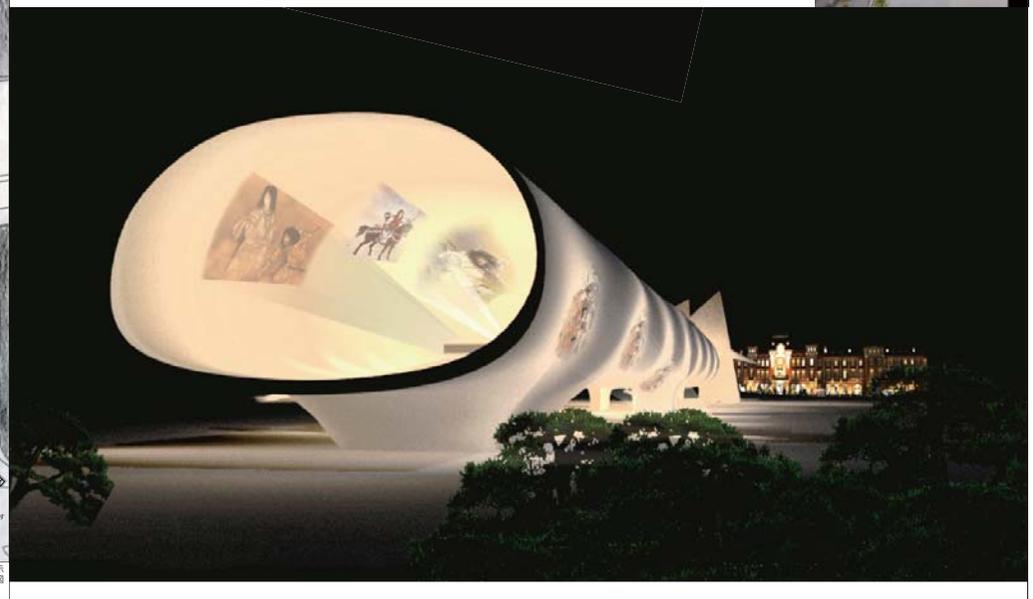
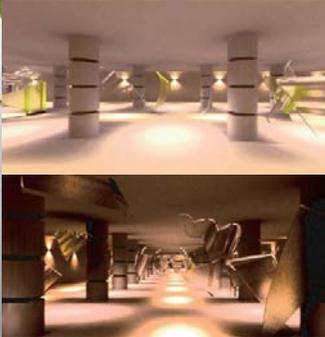
行幸通り上空映像視覚パヴィリオン

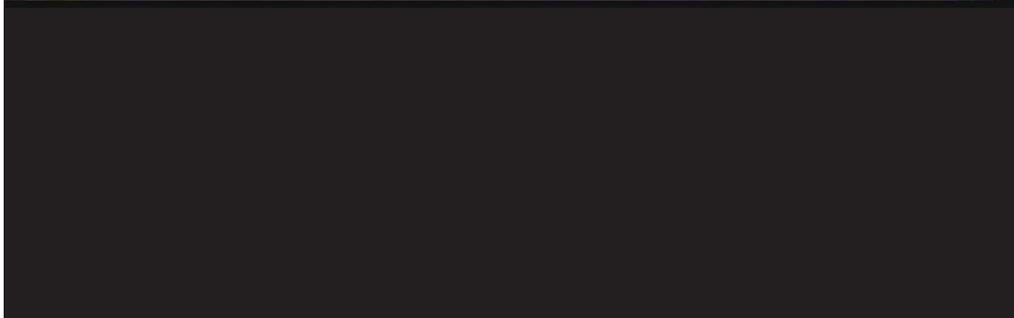
行幸通り地下聴覚パヴィリオン

内部より原則三ヶ所より内観に向けて映像を投影

外部よりパヴィリオンの外観に向けて映像を投影

映像展示パヴィリオン 断面図





本プロジェクトは、新天皇即位のセレブレーションの一環であるとともに、国家という見えない枠組が不可避に浮かび上がる状況下で、人びとの想像力を喚起し、皇居の自然も含めて、現在の天皇システムおよび天皇そのものを、空虚であり続けながら、確かな象徴作用の働きを持ち得る情報世界の中へ定位させ、さらには既存の国家の枠組を超えた、幻想の共同的イメージとしての情報拠点の場（＝広場）の仮設を試みるものである。

東京タワーと東京スカイツリーといった空虚なモニュメントを欲する東京の気質を認めるならば、今後の天皇制がいかなる様相を呈しようとも、その構造そのものがもう一つの新たなモニュメントとして還元されることになる可能性は十分にあるだろう。